

伝中院通躬筆『狭衣物語』卷一翻刻（下）

青木祐子・鈴木幹生・勝亦志織・近藤さやか・千野裕子

はじめに

本翻刻は、前号に引き続き、学習院大学文学部日本語日本文学科蔵、伝中院通躬筆本『狭衣物語』（91337/5004）を翻字したものであり、今回で巻一の翻刻が終了する。翻刻の凡例は前号に示した通りである。なお、書誌情報を末尾に付す。

三十二 源氏の宮と堀川の上の碁

源氏宮はふるきあ／と尋給へりしのちさやかにみあはせ給はすことのほか／なる御けしきをされはよとつらく心うきにいまはた／おなしなにはなるとひたふる心もいてきてさるへき／ひまをみ給へと人めこそかはる事なけれとあさま／しうかりける御心はへのうとましようおほされて又／いかでかさるみ、たにきかしよういし給へれはいはの／水のつふ／と聞え給ふへき人まのほとたにそさら【41ウ】にありかたかりけるひるつかたまいり給へれは大宮も／こなたにおはしましてもろともにこうたせ給なりけり／とくまいりてけんそつかうまつるへかりけ

りとてちかや／かにる給へるにちいさき御木丁なとをしやられて／つねよりもはれ／しければ宮はいとはしたなしと／おほせとは、みやのみ給へはれいのやうにもえそむき／給はす御かははいとあかくなりてこもうちさしてこはん／にすこしかたふきか、りて御あふきをわさとならず／まきはし給へる御かたはらめ御ひたいつき御くしの／か、りなといまはしめたる事にはあらねとうちみた／てまつることに猶たくひあらしと見え給御ありさま／のうつくしさは千夜を一夜にまもりきこゆとも【42オ】あくよあるましくおほゆるにもあすかるのやとりはたは／ふれにてもあさましくおほえ給にいと、しき涙こほれ／給ぬへければまきはしにさてたれかせんをはなと／きこえ給へとみつけ奉り給てれいのまつこと／お／ほしたらねは大宮もなをと聞え給はて夜へうち／よりこそたひ／たつねさせ給しはいつこにもし／給しそなをかの侍従の内侍のもとにせうそくものし／給はぬはひか／しきこと、むつかり給めりきこゝに／はた、なにことも御心にまかせてと思ふにいさやいか／なるへきことにかうちなけかせ給へるも人のおやけな／くわか

うおかしき御ありさまなりその御いらへはいか／にとも聞え給はてとの、れいなぬ御けしきなり【42ウ】なりつるはこのかんたうにこそ侍けれとう院のにし／たいの御しつらひはなに事にかはと聞え給へはこき／さいの宮に有けるはくの君のむすめはかこつへき／ゆへやありけんは、うせてのちはいとあはれにてなと／き、給てけるをかのうへのむかへとりてつれ／な／くさめにせんとなんの給とそありしさやうのれうに／やあらんをのこ、のいとあやしきもあなれと宮の少将／になんたる

とてかの宮のこにし給となんき、／しそもさるへきやうやありけんなどの給はすれは／それも殿の御こにてあれななにかしにはにぬに／やあらんはらからあまたもたる人こそうら山しけれ／しのふへき人たになきにとてもあはれとおほし【43オ】たるけしきのけにた、みる人たに心くるしけなる／御さまなれは大宮れいのゆ、しきことにくちなれ／給へるこそ心うけれとていといま／しくおほしたるを／かはかりのことをたにかくおほしたるよ行すゑはか／／しかるましき心の中を御らんせさせたらはまいていか／になと思ひつ、けらるゝに涙もこほれぬへしちいさき／木丁に宮はまきれ入給ぬれはすさましくてはし／つかたに人々と物かたりし給に御まへの木たちこく／らくあつかはしけにみゆる中にせみのあやにくにな／きいてたるを見いたし給て／□□□こゑたて、なかぬはかりそ物思ふ身はうつせみ／におとりやはするなとくちすさみにいひまきはして【43ウ】蟬黄葉にないて漢宮秋なりと忍やかにうち／すし給御聲めつらしけなき事なれとわかき人々／はしみかへりめてたし

と思ひたるもことはりなりさは／かりあたりまてにほひみちてむかひ奉る人は物／思ひもわするゝ、やうなりあいきやうなどをひとへにほこ／りかにもてなし給はていたくしつまりて心ちよけ／ならす思ふ事有けるにのこりおほかる御けしき／にており／／はものおもはしけに心ほそけなるくち／すさみなとのみし給へはあらきゑひすもなきぬへ／き御ありさまなり

三十三 飛鳥井女君との逢瀬

日のくれゆくまゝにひもとぎ／わたす花の色ゝおもしろうみわたさるゝに袖より／ほかにをきわたす露にけにたまらぬにやとなかめ【44オ】いたしてとみにもたち給はすむしのこゑ／／野もせ／の心ちしてかしこましまてみたれあひたるを我た／にもとかしうおほされけり月いて、ふけ行けしきに／かのほとなき軒になかむらんありさまもふと思ひ出／られ給ふおほろけならぬおほえなるへしおほしてみ給へは／おほしやりつるものしるくしとみなともまたおろさて／はしつかたにそなかめふしたるこさらましかはあはれ／にて袖うちかはしてこまやかにかたらひ給にひるの／御ありさま思ひいてらるゝ、によろつにこよなきめ／うつしなどはなにのなくさむへきそと思ひいてられ／なからわさとけたかくまことしきよりは中／／さまかは／りたるうちとけなとよりはしめものはかなけに【44ウ】らう／／しからぬもてなしなどのあやしきまでらう／たくみてはえあるましくおほせは思ふ事かなふま／／しくはありはてしと思ふ世にほたしとまでやな／らん思ひつ、けらるゝ、にもれいのもろきなみたは

／まつしるをいか、心うらんとつねよりも物なけかしけ／なる
けしきのあはれなれは久しく世にえあるま／しき心ちのすれは
世の人などのやうなる心はへなと／もことになくてすくしつる
をいかなりける契にかは／かなくみそめ聞えてのちはみすてん
ことのあはれに／おほえ給をさらはいか、はおほさるへきそを
たにのち／のとたいひけんあふにはかへまほしかりける物
／をとてをしのかひ給へるまみすこしぬれたるなと【45才】さ
やかならぬ月かけにこれは猶音にき、わたる人／にこそおはす
めれ我身のほとを思ふにも猶たの／むへき御ありさまかはかや
うにおほしすてさらんほと／はかりのは風にまよひなむこそ心
にくからめと思へは／けに涙とりあへすこほれぬるもはしたな
くて／かほをふところにひきいる、まゝに／□□花かつみか
つみるたにもある物をあさかの／ぬまに水やたえなむものはか
なけにいひなしたるけ／はひなとわかひたる物からうたし／
□□としふとも思ふ心しふかければあさかのぬま／に水はた
えせしかくいとくことと思ひ給ふともな／からへては心のほ
ともいまみ給ひてんならはぬなを【45ウ】さりことなどは人は
いふものともしらさりけり心より／ほかの事をのつからなんあ
るともわたくしの心さしは／かはらしと思ふなと心ふかけにか
たらひ給まゝ、にいと／かなしうなりまさりて猶かくなどやほの
めかして御け／しきをみまほしと思ふも思ひたつかたのことと
です／こしわか／しきさまにたにあらす中／おほしやらん
に／もあさましうはつかしければた、ゆくゑなくてやみなん／
と思ひとるかたはつよきものからあさましかりける／心のほと

かなとしはしはいかにおほしいてんすらんと／思ふにせきやる
かたなき袖のしからみを君はた、ひ／とへにわかひたるさまに
てわかゆくゑなきもしなし／などはつらきかたに思ひたると心
え給ひてとかへる【46才】山のしあしはとのみ契給けり

三十四 今姫君、洞院の上に引き取られる

まことやかのおほきお／と、の御かたにはこの君むかへとりて
にしのための玉／をみかきたるしつらひすへ給てみ給にあてや
かに／さてもありぬへきさまなれはとし比のほいかなひて／は
れ／しともてかしつき給ふさまよつかぬまてみゆ／殿のうち
にも世の人はいみしかりけるさいはひかなと／めてけりとしは
廿にそなり給けれといたうおほ／ときすきてあまりいはけなく
ものはかなきさまに／てけにおほろけに思ひうしろむ人のはか
／しき／なくはうしろめたけにそおはしける心に思ひあまる
／事ありとも色にいたし給へうもあらずことのほか／にあさま
しき事なりとも人たにもてなさはをの【46ウ】つからしのひす
くしつへくおはするをよき女のかしつ／かれ給たるはかくこそ
おはすへけれとみゆる物から／あまりむもれ給へるけしきなと
はかくはな／とも／てなされ給へる御ありさまにはたかひて
行すゑや／いか、みなされんと心くるしかりける又なきものに
／思ひかしつかれたりしおやの御もとにてたにかくはるけ／と
ころなかりし御心はへのまいてにはかには、にもを／くれかな
しうせしめのともうちつ、きうせにしかは心の／うちにはいと
かなしかりけるにまめやかに思ふ人たに／そはてかくしらぬ所

にむかへられてありつかすは／れはれしうもてなされ給に我にもあらぬ心ちし／てほれまとひ給へりうせ給にしは、のしそくのたか【47才】きましらひして人かすなれて世にありわふるさ／すかにゆへつきものみしりかほにてかたはらいたき／物このみさらすとおほゆる有けりをはのあま君かゝる／人よひとりてそへたるけにゆへ／しきけしき／にては、しろにしたりうへ時／み給にいてやと物／しくみ給へはこまかなる御心さまにはあらてさすか／におほとかにて人のありさまなどはいたうもみし／り給はすうはへはかりはかしつき給にこの御は、しろそ／あしくせはかたはらいたき所も有ぬへかりける心に／まかせたるつくりおやとしたてたるわかうとの思ひ／やりすくなきかきりかすもしらすあつめさふらは／せて夜となれば殿上人諸大夫までいたしあはせ【47ウ】てさくけしきともいといまめかし君はた、あか／このむつきにつ、まれたる心ちしてあるにもあら／すまかせられ給へるしつらひさまなどのめてたくおなし／わか身とおほえぬを人しれぬ心のうちにはは、やめ／のとなにこれを見せたらましかはいかて人なみ／になさんとあけくれないひ思ひたりし物によしなき人／にまかせられて心に思ふ事もいはまほしき事も／つ、ましくはつかしうてやみにむかひたるやうにおほ／ゆること、思ひつけては忍てうちなき給けりされと／た、みるにはうつし心もなきやうにてそおはしまし／ける

三十五 中納言に昇進した狭衣、今姫君のもとへ

九月ついたち比なをしもの、あるに中将の／君中納言になり給にけり大殿これをもいま／【48才】しけにおほしたれとさのみやとてしたいのまゝにあ／かり給なるへしよろこひ申に内春宮なとまいり／給とてつくるひたて、まつ殿の御かたにまいり／給へるにかたちありさまなとつかさくらゐにそへ／てゆ、しきにのみひかりまさり給をこいみも／しあへ給はぬけしきにてたちぬつくるひ給けし／きそこはりにもすきてかたしけなくあはれけ／なりけるおほきおほい殿の御かたにまいり給へる／つゐてにこのいま君のすみ給にしたいのまへ／をすき給まゝ、にいかやうにかとけしきもゆかし／ければわたとのよりすこしのそき給へはみす所／／をしはりて人さまあまたけはひしてこほれいて【48ウ】たりのきさいの宮の人さまあまたなんまいり／けると人のかたりしも心はつかしうまた見給はぬあ／たりなればよいいてあゆみいて給へれば人さ見／つけていりさくけはひとものさしかしきを／あやとみ給に木丁ともおくよりとりいて、かは／／／／／とたてわたしすそうちひろけひとも／のよろはれたるをとひきかくひき廿人はかりた／ちさまよひつくるひさはくきぬの音木丁などの／を／とにも聞えずあはた、しくみつかぬ心ちし／給へといまやそ、きやむとものもいはてつく／／と／ゐ給へはからうして木丁たて、のちをの／きぬ／のすそ袖くちわらはへのかさみのすそなどのみた【49才】りかはしくなりたるをつくるひ給てこ、か

しこより／をしいてわたしでやう／＼のとまるにやとおほゆる
ほと／に木丁のほころひをはら／＼ときさはくを／ともしる
くてひとつほころひより五六人かほをな／らへてまつ我みん
／＼とあらそひたるけはひとも／のしのふるからにいとかしか
ましからうして見えたる／にやあらんまことにめてたかりけり
あな物くるはしや／日比見つる殿上人などはた、へちなりけり
とさ、／めきあへるいとうゐ／＼しう待るもとかめさせ給へく
／やとらみまいらするなどの給御けはひけにお／ほろけの人
はふといらへにくけにはつかしけなれ／はにやそこらしいし／
と聞ゆる人御いらへきこゆる【49ウ】はなくてそ、やまつはふ
ようなり君の給へ／＼と／さ、めきしろひさ、めきたちてにく
るもあるへし／あなわりな物にくるふ君かなまろはましてこせ
な／りとしてそ、はしるなれはきぬのすそをひきと、む／るにと
らふるにやたうれぬきう／＼とことさ、め／きわらひ入つ、し
はふきにし入もありあるはまた／あなかまや／＼さはかりはつ
かしき御有さまになへ／ての程と思ひ給ふかなともせいするな
りさま／＼／あやしき心ちし給てしりめはつかしけにみいれつ
、／なけしにをしかりてお給へるけしき此みすの／まへには
あはすそありける猶た、きえ入／＼あふき／なとうちならしつ
、わらひそほる、けはひともの【50オ】くるをしければこは
いかにとようるまのしまの人と／もおほえ待るかなとてすこし
ほ、ゑみ給けしきな／とみすのうちはつかしけなり

三十六 今姫君の母代登場

おくより人よりきて／木丁のまへなる人にた、うらみ哥をはた
とよみ／かけよとさ、めくなれは我君そなめこゑはよき／まろ
はさらに／＼わらひいれはあなまはゆの色／このみやとてかた
のわたりをあふきしていたくうつ／なれはたうしは君なしとて
つむなるへしあしうし／てんけりいたし／＼そこはなて／＼と
しのひあへ／ぬこゑいつくらんとおかしきにしぬへければた
ち／のきなんとするほに／おとなしきこゑのたかやか／にした
りかほなるいてきていてやさふらふ人／＼から【50ウ】こそよき
人はおかしき名もとらせ給わさなれはかは／かりにてはわか人
たちさふらひ給はてありぬへしと／さすかにしのひてにくみわ
たしてさしよりて／きこゆめつらしき御こゑこそおほしたかへ
たるかとて／□□よし／の川なにかはわたるいもせ山人のため
／なる名のみなかれてとけにはたとよみかくるけは／ひしたに
のとかはきたるをわかひやさしたちていひ／なすこれ／＼のは
、しろなるへきとき、給ふ／□□うらむるにあさ、そまさる
よしの川ふかき／心はくみてしらなんおほつかなき心ちし侍り
つるに／うれしき御けはひと思ひ給つるに物をこそあしさま／
に申ない給ひけれとの給へはさはやか／＼にうちわら【51オ】ひて
さらは今よりのけさんをまめやかにつとめさせ／給へかしわか
き人／＼の思ひむせふめはいぬもときて／とかやたかやかにい
ふいとあやしきたとひなり

三十七 狭衣、今姫君の姿を垣間見る

まめやか／にはおもてふせにやおほさるゝとていまゝてまいらさ／りつるをけふはかはるしるしも御覽せられむとてなん／おまへにかくと聞えさせ給へこのみすのまへはならひ／侍らねはしたなく思ひ侍れとかくこんのうすさに／けふはかりはなくさめ侍をいまより後そうらみきこゆへ／きとてたち給に萩のうは風のあらゝかに吹たるに／にはかにみすをたかく吹あけて木丁もたふれぬれ／はとみにひきなをす人もなしあなわひしあれを見／給へ／といひつゝ、我も／きぬをひきかつきつゝ、ひ【51ウ】とつにまろかれあひたる程にのと／とみいれ給へ／はかうそめににひ色のひとへくれなぬのはかまの／きはみたるをきてひるねしたる人とのさはくにおと／ろきてあふなくおきあかりたるにいとよくみあはせ／てあさましきにやとみにうちそむきなとせずあき／れたるけはひかはいとおかしけなめり心なのさま／やとはみえなから女の有さまともよりはこよなくみつへ／かりと思ひまし給つかのせうとのかこちけるゆへに／や少将にもいとよくにたりける殿の御事はいふへく／もあらざりけりとみるにたゝならずや思ひ給ふらん／やうのものとあやしの心はへやと我なから心つきなし／はゝしろからうして木丁をこしつればたちのき給ぬ【52オ】

三十八 狭衣、今姫君について堀川の大殿と語る

又の日殿の御まへにてきのふの事ともなと申給つゝ／てにかの

とう院にはものしたりきやにしのたいにす／むなる人をこそまたとふらはねいかやうなるけしきか／みゆるとの給うち／のありさまのいとあやしきをこ／なからみかゝみ給ふらんとはつかしうおほすなり木丁／のほころひあらそひしきかけとも思ひてられて／いとおかしきをねんするけしきやしるくみ給らう／ちわらひてよしなきものあつかひこのみ給ほとに／たかためにも中／なる事やとこそみゆれとしころ／かくいふものありとはきゝしかとおほえぬ事なれは／かやうの人のすくなきくさはひにもとりいてぬ物を／なにのたよりにかくまでもありそめにけるにかと【52ウ】ありつかすやとうめき給もけにとはきけとあさま／しとあきれたりしかほはさすかににくむへうもあら／さりつればつれ／におほされんにこと人よりはなと／かあしうも侍らしたしかなる名さしにてとかくさす／らへ給はんもいとおしう侍るへしとその給いさやかくいひ／そめけんもおほえなくそあるや夜めにみしかは宮の／少将こそいとよくにたりしかせうとのしれものあなり／それもかの宮の御子とそいふなるこれもさなるへし／などの給

三十九 飛鳥井女君をめぐる乳母の対応

まことかのあすかあにはめのとみないて／たちて君をさへひきくせんもいとくるしうざりと／てとゝむへきならねはさすかに思ひなけく人／しれぬねのみなかれてたれをたのみてかはたちち【53オ】とまらん山よりもふかき谷にいらんもさてこそはなと／思ひ侍るもわか心と思ひはなれ聞えんことはしのひ／か

たくあはれにおほゆるもかつはことをこかましき／心と思ひたるけしきのいとをしきをみるにさ／らはなにかはくたらせ給京にもたよりなくてひとり／と、まらせ給はんこそうしろめたうも侍りめ又我も／いかにともおほしめさめ女は千人のおやめのとやくなし／御おとこのおはせぬほとなりまいてかくやむことなく／ものたのもしき人にもおはすなり御心さしいとねん／ころなるをひきはなれてかゝるあつまちにたち／そひ給はんいとあるまじうかたしけなしなとさかに／あるへきことをはいひなからいかに思ひかまふることか【53ウ】あらんこの人のおはするよひあかつきのかとも心やす／からすかきうしなひかちにもてなしつふやくけはひ／御ともの人さきゝてめさまじうあさましきにふみ／こほちていりなまほしきおり／ありけり殿にもし／のひてたれと思ふにかかくなと申せは女のけしきの／あやしうのみあるはこのみしほかけの女のありし法の／師にとらせんとするなめりさやうのことに思ひむす／ほゝれたるなめりと心え給いと心つきなくゆゝしけれ／と女君のありさまのあやし／くのみ見ゆるはいてやさ／らはとてやむへくもおほされねはいかにせまし殿にさふ／らふ人さのつらにてやあらせましと思へと人しれす／思ふあたりのきゝ給はんたはふれにても心とゝむる【54オ】人ありといかてきかれ奉らんと思ふ心しふかけはさも／えあるましさらてはさすかにこゝかしことあつかひ給／はんもいかにそやとおほされつゝいまをのつから我とし／りなはいとはしかくろへぬへきところもありぬへく／は有さまにしたかひてとおほすなるへし女君にも／おい人のにく

むなるへしなことはりなりやたのもしけ／なりしのりのしをひきたかへてかく物はかなき身の／ほとなれはをとなしの里たつねいてたははいさ給へよわ／つらはしき人のさすかにあればしはし人にしらせしと／思ふほとにかくおほつかなくあたる物におほしたるも／ことはりなり我はなに事にてかはあなかにしら／れしと思ひ給へきいひしらぬしつのめなりともこれ【54ウ】よりかはる心あるましきを猶たのむ心のあるましき／なめりとうらみ給へはさそふもたにあらましかはと物／あはれに思ひてこの別當の少将とおもはせ給へる／なめりせいすへき人ありなどの給はと思ふにもかり／そめにうちたのみて行へきかたを思ひとまらんこと／はあるまじうおほえなからいとかくめてたき御あり／さまにてなつかしう哀にかたらひ給を行かたのめや／すからんにてたにいかてかはあはれならざらんもりの／うつせみとて涙こほれぬへきをまきはしたるけしき／いとうたてけなり

四十 飛鳥井女君、懷妊する

かくいふ程にこの女君たゝ、にも／あらずなりにけりうちはへて物をのみ思ひてありし／さまにもあらぬけしきなるをたれもたゝこの御いて【55オ】たちを思ひなけき給つるとみるにしろきことともあり／てめのとみしりていてあないとおしやかゝさへなり給へ／るものをいかゝせさせ給はんする君に猶聞えあはせ奉／り給て御けしきにこそしたかひ給はめかくなり／給へるときゝ給てよもあた／しくも思ひ給はしと／いへはいかなりと

もたのむへきありさまならはこそあ／らめみえぬ山ちのみこそ
よからめといふ物からけにか／くさへなりにけるを露しらせて
やみなんことなといみ／しうおほゆれとかけてもまいていひつ
へきにあら／ねは日をかそへつゝなきなけくより外の事なし

四十一 狭衣の乳母子道成、飛鳥井女君の乳母と謀る

この／殿の御めのと大貳の北のかたにてあるなりけり／ことも
あまたある中に式部大輔にてらいねん【55ウ】つかさうへきか
かやうの人などの中には心はへかた／ちめやすくてすき／し
う色このむありけりいか／なりともかたちすくれたらん人をみ
んとてめも／なくてすすにこの女君うつまきにこもり／たり
けるをのそきてみて思ふさまなりければ／せうそこなとしけれ
とみつからはきゝいれぬにこの／めのとはいとみゝつきにおほ
えけれどたゝいまかく／たのむそうのいひちきりたればえいな
むましうて／たちまちのうけはせねとつかさなとえてくたり／
給はん程にはさもやなと契けるにかくこととも／たかひて身は
たよりなしなまきんたちのいたう／かくろへて夜／時々おほ
するをふさはしからねは【56オ】あつまおとこにつきてやいな
ましとおとすなり／けりされとこの式部大輔おやのともにつく
しへく／たるに思ふさまならん人をなむゐてゆかんとする／と
いひをこせたるにいと思ふさまなる心ちして／別當の御子少将
のかよひてあるなれはめのと／うけひかすなんむつかるといふ
人のありけるをよる／こひてせうそこしなりけるにてらにては
あるま／しきさまを聞えしをめのと思ふやうにめてたく／おほ

えてあつまも思ひとまりてまことにさもおほさ／はしはし君に
はきかせ奉らてくたり給はんほとに／むかへ奉り給へといひけ
れはいみしうよろこひて／さやうのほそきんたちにかけめにて
おはせんよりは【56ウ】たゝ心み給へおとゝ御さいはひにてこ
そおはせめなと／ことよくかたらふいてたちの物なとけによけ
におこ／すれは心ゆきはてゝかみしもの人もとめなとしける／
にしきふのたいふのもとりはくたりもちかうなり／にけるを
さはたかへ給なと日に千たひいひおこ／すれはあなまか／し
よにたかへ侍らしそのあかつ／きに御車を給へさりけなうてふ
とわたし奉らん／といひやりて心のうちにはみないてたちけり
君には／いてたちはとまりぬたゝならすさへおはしますにいと
／心くるしうてこのたひはいひはなちてやりつるなりいま／は
とかくおはしまさんをみてそいつちへもまかるへきな／めりと
心ゆきたるさまにていへは女君まことゝ【57オ】思ふに心すこ
しおち給ぬうちはへ心ちさへあしかり／つるもおしからぬ身は
とういかにもなりなはやといそかれ／つるをかくなりにけりと
きゝあらはしてあはれなりける／契かほと思ひしられてうきと
のみ思ひいられつるをす／こしいたはしう思ひなるもあはれな
り

四十二 狭衣、野分のなか飛鳥井女君のもとに通う

野分たちて／風のをとあらゝかにまとうつ雨も物をそろしうき
／こゆるよひのまきれにれいのいとしのひてまきれいり／給へ
りいつもなへ／とやつれなし給へるに雨にさへい／たふそほ

ちてにほひはかりはいと所せきまでくゆりみ／ちてとなりの山
かつとも、あやしかりけりかやうのあり／さまはまたならはさ
りつるを人やりならぬわさかなとて／ぬれ御そときちらしてひ
まなくうちかさねてもこゝろ【57ウ】よりほかにへたてつるよ
な／＼のわりなきをさは思ひ／給やかはかり人に心とむるもの
とこそならはさりつれ／なとつきせすかたらひ給て／□□□あ
ひみては袖ぬれまざるさよ衣一夜はかり／もへたてすもかなわ
りなき心いられなとはいづならひ／けるそよとの給へは／□□
□やたつれは袖ほしわふるさ夜衣つるには／身さへくちやはて
なむといふも物はかなけなりよ／しみ給へよ世のはかなさなど
こそうしろめたけれな／こりなき心などはいかなる人のつかふ
わさにかなの／給をさしもあらしなとかと／＼しきさまにも
あらず心／のうちにやいかならんめのまへはた、おなし心なる
【58オ】さまにもてなしてかくたしかにいひしらせ給はぬをも
と／やかうやとあなちにもたつねしらす又我身のゆくゑ／も
さりとてうちとけいはぬものなかなよ／＼とらう／たけにて
なひき聞えたるさまあやしうまことにらうた／けなるを見つく
ま、にかきりなき人々の御ありさま／にもおとるましくてわた
るつき物などおほさゝりけり

四十三 飛鳥井女君、狭衣の夢に現れる

れいの夜ふかくかへり給てわか御かたにふし給／てすこしまと
ろみ給へる夢に此女の我がたはらに／あると思ふにはらのれい
ならずくふらかなるをこはいか／なるそかゝる事のありけるを

などいま、てしらせ給は／さりけるかゝる契も有ければなにか
行すゑをもう／たかひ給ふとて夢のうちにまあはれと思ふに此
女【58ウ】□□□行ゑなく身こそなりなめこの世をは江なき／
水をたつねてもみよといふとおほすに殿の御かたよ／りけふあ
すはかたき御ものいみなりけるをわすれさ／せ給にけるあなか
しことよりの御文なとりいれさせ／給などの給はせたるにふ
とさめてむねさはけはをさへて／うけ給はりぬとは聞え給へと
心さはきせられてあやしいか／にみつるそまことにれいならぬ
ことやあらんといまぞ思ひ／あはする事有ける心ほそけなりつ
るはいかなるにかなと／つねよりもおほつかなくゆかしきによ
さりもえおほ／すましきなればこまかに御文をそかき給つねよ
り／も今もみてしかとなむよさりものいみなればえ／ものす
ましきにや【59オ】□□□あすか川あすわたらんと思ふにもけ
ふのひる／まはなをぞ恋しきまこととくかたりあはすへき夢を
こ／そみつれ心もなくなるとこまやかなれと返ことにはた、／
□□□わたらなむ水まさりなはあすか川あすはふちせ／になり
もこそすれふてつかひもしやうなとわさとよし／となければとな
つかしうおかしきさまにみゆるは思ひなし／にや

四十四 乳母、言葉巧みに飛鳥井女君を説得

かしこにはつくしの人あかつきになんゆめ／＼たかへ／給など
いひければたゝあかつきにさりけなくて車を／ふとよせ給へた
かふといふ事はあなゆゑ、しといひやり／て女君のひとりなめ
ふし給へる所にきてあすの／またつとめてこの西に井はるとて

いゑあるしほかへわ／たりけりいか、せさせ給はんする車のことをたれにいは【59ウ】ましあはれかやうのおりにこそいきしは思ひいてらるれかく／のみ世中にたよりなきにこそおもはぬ山なくわり／なけれいみしう思ふともやもめは思ふことのかなはぬに／くちおしきやか、れはえせみやつかへ人はしのひかたらひ／人はまうくるそかしまこと／このとなりのするかのめ／きみこそもの、なさけありていはむ事きかんといひしか／いひにやらんさてこのくら人の少将との、御めのとのいゑかりてしはしわたし奉らんなんてう事か侍らんなとし比／いみしきしる人なりこの御ことの、ち中／いとつ、ま／しうてをとつれぬをかくとやき、給ふらんさるにても／あしかるへき事かはといひちらしてたちぬるをあなみく／るしありきもこりにしかはつちいまでもありなんま【60オ】いてそのしらぬ人のもとにはいかでかとの給へはあなまか／くしやた、なる人たにつちいまぬや待まいてかく／おはします人はあなおそろし／／といふよろつよりは／かの少将とのみ思ひていかなるひか事いはんとすらんよ／なよな月影もつねにまへわたりし給ふひかりにみ／あはすれはまされ給へくもあらぬ物をと思へととやかう／やとこの事をいはんにもよきこと、思ひたえぬけし／きなるにはいとつ、ましければいかなるひかことも、を／しいてんすらんと思ひつ、くるにももとより物はかなく／あやしかりける身のありさま思ひしられてかくまでも／さすかにみえ奉るは契はあさからす我なからもしら／る、をこの事まことにさもあらはさりとも思ひかすまへ【60ウ】給やうもありなんかしとの給契有

さまもさりとて／もとそら事にはあらずやなと思ふに我身すこし／いたはしうなりにたるをこのたのもし人やいか、もて／なしはてんとすらん源氏宮の御かたへと思ひしもか／やうの人に見え奉らんかはつかしさに心こはきやうに／てやみにしをけにかくおもはすなるさまにても見え／奉りけりいまはまいていつゝにも／もさやうのすち／など思ひたつへきにもあらずかしなどいひ／／のはて／／はうしろめたうそ思ひつ、けるる、にまくらもうきぬ／はかりになりぬ

四十五 乳母、さらに飛鳥井女君を説得

めのと又きて萬のものとりした、め／さるへきものはぬりこめにをきなとしつ、京の中に／は一夜はかりと思ふましき物そまいてこの井は【61オ】五六日にもなりぬへかめりつ、なとたてんほとまでこそ／はおはしまさめ車もありかたきにたま／／ありか／せ給ふもかくうるさからせ給めるになといふめれば君／このの給ひつところかさらは猶いくましとこそおもへ／しらぬ所にいかでかさまではあらんと給へはさおほし／めさはときは殿にわたらせ給へといふはこ中納言の／りやうせし西山のあたりなりけりいさ又ひさしうつ／ちをいましとおほしめさは御心なりをのか申さんことは／はか／／しからしとかうおはしまさんおりの御ありさま／もさすかにそれまていきて侍らはあやしの女のみこ／そみ奉らめと思給にいま／／しきそやさらたにこ／そ子うむにはとようとあふ物はかならずいてくれ御【61ウ】いみのかたにさへあるよこのたのもしき人の御心はへさ／

やうの程とてもかひ／＼しうもてなしあつかひ給へき／にこそ
みえ給はねいひおもへはくにてそ侍らんかやうの／君たちはお
やなどのいたちたのもしきあたりをたに／すこしもうしろみや
めはうちすて給つゐてやまし／てなにかすとかはおもはんあ
なをこかましや又御心／さしあらはところかはるともおはせさ
るへき事かは恋／こそみちのとさすかにうちわらひていふかく
ほかへいき／にく、するもこの人によりてと思ふそかしと思へ
はそ／のことにあらずあやしきありさまなれはありきもの／
うくおほゆるをいさやいと、ものこりしてとの給へはさ／てそ
れもあしうや侍けるそれによりてこそかゝる御さ【62オ】いは
ひも御覽すれかしこは中／＼わかき人のおはしかよ／はんにお
かしき所なれはうちしのひて二三日もあ給やう／もありなむな
にかしかれかしと、めて侍れは御つかひに／もそこ／＼をし
へ侍なむおはしましたらんにもよく／＼／あない申せよといひ
をき侍ぬなど、と、むるけすとも／よひたて、いふもかたはら
いたければさまたてたつぬる／人もあらしといと、おほつかなき
ものの給けふ行ゑ／なくはむかし物かたりなどのやうにこと
さらひてやおほ／さんまことにかくと聞えはやと思ふに／□□
□かはらしといひしゐしはまぢみはやときはの／もりに秋や
みゆるととかへる山のとありし月影はこの／世のほかになりぬ
とも忘れ給へくもなきをいかになし【62ウ】つるそよとあやし
く物心ほそく火をつく／＼となかめ／て涙くみ給つるまみのけ
しきいと、らうたけなる／をめのとさすかにうちみをこせつ、
心もしらぬ人に／うちまかせ聞えてはるかなるほとにいてたち

給はくち／をしきさまかなとなみたくれけり

四十六 飛鳥井女君、連れ出される

あかつきに車のを／としてかゝた、くなれはいてあはれ人のた
めにま心／なりけるするか殿のこゑかなあまりとうさへ車を給
へ／るよとてひきいれさするをきくにもむねうちさは／きてあ
すか川を心もとなけにの給はせたりつるはよ／さりなとはれい
のものの給はんにかやうにいひてか／かへり給はんとなを
ものうきもうたである心かなと／めのとの物いひも心はつかし
なからおほつかなくて物し【63オ】給はんは心よりほかなる身
のあやしさをまつ思ひつ、け／られてうこかれぬをつま戸をし
あけてさらはとうわた／らせ給ひね人のいそきかへらんひさ
しうならんもいと／をしといひてあさやかなるきぬもてきてう
ちきせくし／のはこやうのもの車にとり入なとしていそきに
いそき／てをそし／＼としし出るやうにすれば我にもあらで／あ
さり出るに何と思ひわく事はなければ心さはき／してむねつと
ふたかりたる心ちす鳥もいまぞ鳴なる／□□□あまの戸をやす
らひにこそいてしかとゆふつけ／鳥よとは、こたへよなをた、
今などは聞えまほしきとみ／にものりやらす涙せきあへぬけし
きをまいていか／にとみちのほとんありさま思ひやらるめのと
又人ひ【63ウ】とりはかりそしりにのりぬる

四十七 飛鳥井女君、船に乗せられる

かとひきいる、よりやなく／ゐなとおひたるもの見もしらぬす

かたしたる物とも／かすしらす火はひるのやうにともしてあけ
はてぬさ／きになといふけしきもあやしきものおそろしきに／
こはいかなる事そとた、かきくらす心すれはきぬひ／きかつ
きてふしたるにかの行かたしらぬとありしをき、／はしめより
月ころいひ契給つことの葉けはひさま／思ひいてられて我身
いかになりつるにかと思ふたにしみ／しきによと、いふ所にゆ
きつきぬれ舟にのせんと／の、しりあひたるにされはこそとき
にはあらざりけり／と思ふにものもおほえねとめはみゆるに
やきしに舟／ともよせてのせうつさんとして廿はかりのおとこの
きた【64オ】なけなしとやいふへからんつき／しうそ、ろか
なるかた／ちなといみしう思ふ事なけに心ゆきたるけしきに／
もてなして大貳殿は今とりかひといふ所わたりま／てはおはし
ましぬらん中納言殿の御ものいみかたか／りつれはとみにえ
いて、をくれ奉りぬるなり御きそく／よろしからざりつれはい
とまもえ申いつましきなめりと／思ひつるにかうみやうのむま
をこそ給はせたなれなと／いひてをくりの人さなるへしおなし
ほと物のとも江くち／のわたりのせうえうこのたひはふような
めり大貳殿／いそき給なとほこりかにうちらわらひたるをなに
もの／ならん行幸かものまつりなとにへたうのしりにやおそ／
ろしけものさけつ、ある物こそか、るかたちはしたれと【64
ウ】みるたにうとましかなるに車によりきて御舟に奉／れねと
てかきいたきてのせうつすほと心のちいかは／かりかはありけ
んめのと心のゆきてものいひあわら／ひなとするをきくにねた
うかなしともよのつねなり／

四十八 飛鳥井女君を口説く道成

いかなるもの、いつくのせかひにいてゆくにかあらんと／すへ
ていひやるへきかたそなきにた、やかておきはし／りて河にお
ち入なはやと思へたと、今おとし入て／みる人もあるましけれ
はた、かしらをたにさしいてす／ひきかつきてふしたりおとこ
そひふしてえもいはぬ／こともをなくさむれはいと、なきま
さりてあや／にくなるけしきなればさの給とまたけき事おは／
せしと思へはおこかましやなにかしの少将のかけめに【65オ】
てみち行人ことには心をつくしむねをこかし給はん／やはあや
しとも又かしつき奉らんをとり所におほせ／かしなまきんた
は中／いと心ちあしきものそ殿の／おはしまさんかきりは何
かしらをえこそそのきんたち／はあなつり給はさめさはか
りの少将にはならんとおもは、／なりぬへきよしみ給へよらい
ねんはかりかへり殿上し／て五位藏人になりてそのぬしとい
れかまさり／けるとなりいて、みせ奉らんくちおしうほいな
しとお／ほすとも今はいふかひなければた、おいらかにもてな
していとしな／しからぬやうにても御心にあかぬ／ことなく
やすらかにてすぐさせ給へきむたちならす／とてをのれをはわ
ろき物と人にもおもはれたらぬ【65ウ】はまたこそ女にくみ
ならはされぬ御まへよりまさ／りてやむことなき人たち我も
／との給つれとう／つまさにて見奉りしより思ひし心な
をりかた／くてめんほくなきめをみ侍るにこそおと、こそなを
／これ申なをし給へなと、いひあたへつ、かつきたるきぬを／

せちにひきのけてかほをみるにほのかなりしよりも／ちかまさりしていと、うたてけにおかしけれは思ふ／さまにうれしくていかでとく思ひなくさめてあかぬ／ことなくかしつきてみんなと思ひけりおと、つれ／＼なりしなこりなくそのあたりのものともてあつかひ／たる心ちうれしう思ふさまなるに女君の御ありさまの／いとあきたくあやにくけになるをいかにみ奉らんさは【66才】かり我も／＼とむこにほしかりし人をすて、かゝる／御けしきはさいはひとこそおほゆれものさまたけ／のし奉るなめりあらみさきといふ物はなたぬ人はかく／よかるへき事はあしうなんおほゆると人さいひあはせ／てなけくをき、ておと、たにさしいて給へやくま／て心うき御心ならんとこそおもはさりしかほいなき／やうにはいかてかおほささらんざりともいとあやしやと／てもものうけなるけしきなり

四十九 飛鳥井女君、狭衣からの餞別に道成の正体を知る

かはこやうのものあけさ／せて人々させたりつるあふきたき物などやうのもの／とりいて、はか／＼しからねとある人々にものし給へ／かゝる人おはすへしともしらざりしにいかてかき、けん／しのひて人あてゆくなりとてそれかしかれかしなと【66ウ】いひてとりちらす中に女のさうそくの心ことなるか／あるをこれはまろか中納言殿のたれとしらねといて／ゆくなる人にならずきせよとて給はせたりつる御／心さしのまゝに奉り給へ御なみたにいたうしほれぬ／なめりなといふをけにな

へてならぬ色あひにこそ／待めれとなとめてあたり又この御あふきもた／まへりつるをあたらしきよりはとて申とりたるめは／つかしき人にもこそあれいたうなれたりとおしませ／給ひつれとかたみによとて給はせつるそはかなく／うちもたせ給へるかやうのものともさへそなへての人／にはにさせ給はぬやといふをきくにもこれはさはこの／うつまさにてき、し物にこそあなれとこと人にた【67才】にあらてあな心うのありさまやと思ふにかなしければ／なき人たるにこの御あふきをさしよせてこれ御覧／せよやいかにして一もしもみはや／＼とたかきも／みしかきも心をつくしてさはく御てよこれみ給は、ま／ろかにくさもなくさみ給なんといふはまことに我みし／おなしものにやとゆかしきに人めもしらすおきあか／りてみつへき心ちすれとかほなどのあきらかにみ／えければなをなきふしたるをわか君をこそかやう／に恋かなしめそのあをひれおとこによりていのち／たえぬへくみ給こそかへりては心つきなけれなにこ／とをいとさまでは思ひ給そまろかかほはこよなく／よきそみ給へ／＼とあまへてきぬをせちにひきあ【67ウ】けんとするにかみ佛かゝるめみせ給はてとくうし／なひ給てよとなきこかる、さまのあまりうたてく／あれはむつかりてたちぬるまに此あふきをとりて／みればた、一夜もたまへしなりけり

五十 飛鳥井女君、狭衣の扇を見る

うつり香※(の)な／つかしさはうちかはし給へりしにほひもかはらてま／なかな、とかきませ給つるをみればわたる舟人かち

／をたえなと返さか、れたるはそのおり我としりてか／き給つるにはあらしなれとた、今我みつけたるは／ことしもこそあれといかてかなしとおほえさらむ／かほにあて、なかる、さまゑもみなおちぬへし／□□□かちをたえいのちもたゆとしらせはやな／みたのうみにしつむ舟人【68才】□□□そへてけるあふきの風をしるへにてかへるな／みにや身をたくへましなと思ひつ、けらる、も物の／おほゆるにやと我なから心うしけさは御ふみありつらん／いかにひて返しつらん又いかにまちき、ておほしつ／らむあすか川とありしおりか、らん物と思ひかけさりし／□□□うみまては思ひやりしあすか川ひるまを／まてとたのめし物を心えぬ夢とありしはいかなり／けるにかときゝたにあはせてやみぬるいふせさよた、／ならぬ事をいかてかしらせたてまつらしとなて思／ひけんさりとともいますこしあはれとおほしてましと／思へと又うちかへし思ふにかなはていのちなからへは／行すゑにき、あはせ給やうもありてさてこそあれ【68才】ときかれ奉らんもいますこし心うかりなんかしなと／てさしはなれたるあたりたにあらてかくしたしく／よろつき、あはせぬへきゆかりにしもありけんとをき／ほとまてゆきつきてこのありさまをみあつかはれぬ／さきにいかにしてもしぬるわさもかなと思へは五六日／にもなれと水をたにとりよせず

五十一 飛鳥井女君、死を決意する

めのときつ、／よろつにいへといよ／かくうかりける心をし

らてとし／ころおやのおなし心にたのみすくしけるさへ心う／くおほゆれはかしらもたけみあはせんもつらうかな／しくてき、もいれすた、ひきかつきてふしたり／おともしはしかてか心ならぬことなればひんなし／とおほさ、らんさのみもあらしと思ふほとにいとあ【69才】さましくていのちたえぬへきさまなれはかくまてお／もふへき事かといとあやしく心つきなくさへおほえ／てあやにく心もつきまさりてとかくひきうこかし／うらむれは思ひわひてをしはかり給ふやうにいとかく／思ふへき身のほとありさまならねはひなしなどには／あらず心ちれいならすのみもとよりありしかいと、／まさりて昨日けふはなからふへき心ちもせぬなり／今はいかなりとも御心にこそあらめといとかくおほ／ゆる程をすくし給へ人のちかきもいとくるしう／おほゆるはいかなるへきにかとなくけはひなとけに／いとたのみすくなけにきえ入ぬへきさまなれはた、／ならぬ人は心ちなとつねにあしうすとかやさやうに【69才】てかかるにやいとかく物なとくはてはかやうの事も／あしからんなる物をといておそろしきわさかなとさす／かにいとをしきていたくもあやにくた、すすくれたる／僧ともにいのりせさせなとよろつにもてあつかひ／つ、はひよりてはとさまかうさまにいひうらむるをきく／たひことにいかにせましかくうきをしらぬいのちなか／さにてつゐにいかならんと思ふにすへきかたなけ／れはこのうみにやおち入なましと思ひなりぬ

五十二 袂衣、飛鳥井女君の失踪を知る

京に／は夜もすからおほつかなく思ひあかし給て又の日いつ／しか御文つかはしたるにかとさして人のをとせぬ／はあやしうて猶た、けはいみしけなるけすのいて／きたるにとへはしらす夜へこの殿にはやとし侍し【70才】なりつくしの豊後といふ人のこのたちぬる月に／この殿をかひ給てしなりけふあすそわたりぬ給はん／するそれやおほし所はしり給らんをのれはた、人なり／こよひゑよとありしかはまうてこしなりといへは／かくすめりなさて／やまむやはなとおとしをきて／となりの人ゑにとへとたしかにいふ人もなければま／いりてしか／なと申せはいとあさましくあへなしと／もよのつねなりいかにもめのとかしつるわざにこそ／あらめみづからの心にはなに事のつらさにかはたち／まちにゆきかくれんとも思はんいみしくとも我心と／さやうにはあらしとみえし心さまを今まてかくてをき／たりつるけそかした、ありし法師のとり返しつる【70才】ならんいかばかりねたしと思ふらんとしらぬにはあらさ／りつれともてさはかんもさすかにいかにそやおほえ／てかくなしつるもあまりなる我心のたい／しさ／そかしあすはふちせにとありしもか、るけしきみ／てやいひたりけんと思ひつ、けらるゝにいみしく／ちおしなに事もたくひありかたくめてたかりし／にはあらてた、なつかしうあはれとおほえつればたちま／ちにみしとまてはおもはさりつわれかくゆくゑな／くなしつるよとおほすにむねふたかりてつく／となかめくらし給ふま

ことしくやむことなききはに／こそあらさるめさるかたのした草のかこともなくさ／めつへかりけるをまことにおそろしけならんもの、なれ【71才】よらんありさまいかはかり思ひまたらんとねたうも／ゆ、しうもさま／おほしやるに恋しく思ひいてられ／給て夜もまごろまれ給はす／□□しきたえの枕そうきてなかれぬるきみなき／床の秋のねさめに

五十三 袂衣、飛鳥井女君を偲ぶ

なにことよりもかの夢のおほつか／なさをいかなることぞときゝあきらめてやみぬる／はいといふせくおほつかなともよのつねなりいつれに／てもはか／しき人にはあらしをまことにさる事もあらはなれかほにもてなさんこそ心くるしうかたし／けなけれまして年月へてか、みのかけもかはらぬさま／にていひしらぬものの中におひいてたらんよいてや／か、れはこそよからぬふるまひはすましきものなれ【71才】すこし人かすなるものゝかくあとはかなきやうやある／なにしかあなかに思ひかすまふきさることもあらし／としゐてあさきかたさまに思ひなせとよろつより／もこのおほつかなきかたのことはむねふたかりてあつ／まのかたへなとき、しもしさもあらはふせやにやおひいてんなとなを心にかゝりて我御すくせのほと／くちおしうおほさる／□□そのはらと人もこそきけは、きゝのなとかふ／せやにおひはしめけむつねよりも心ちよけならぬ／御ことくさにめなれにたる中にも此秋はむしの音／しけきあさちかはらにことならすなき暮し給ても／をのつからまきれ給心のつまと

かいひふるしたる【72才】夕暮の空きりわたりてありかたため
たるくもの／た、すまゐうらやましうなかめやり給へるにしの
山もとは／けに思ふ事なき人たにものあはれなりぬへきかり／
さへ雲あはるかになきわたりてなみたの露もさか／りすきたる
萩のうへに玉とをきわたしつ、なきよ／はりたる虫のこゑ／
さへつねよりもあはれなるに／御まへのちかきすいかいのつら
なるくれ竹をふきな／ひかしたる木からしの音さへ身にしみて
心ほそくきこ／ゆれはすたれすこしまきあげ給へるに木、のこ
すゑ／もいろつきわたりてさと吹入たり／□□□せく袖にもり
てなみたやそめつらんこすゑ色／ます秋の夕くれ【72ウ】□□
□夕くれの露吹むすふ木からしや身にしむ／秋の恋のつまなる
なとさま／恋わひ給てなみたを／をこい給へるてつきのうつ
くしさはた、かはかりをさいは／ひにてこの世の思ひ出にしつ
へしとそみえる雨さへ／すこしふりていと、きりふかく見え
たる空のけしき／まことに物みしらん人にみせまほしけなり又
是涼／風暮雨天とくちすさみ給へるなとをかのときはの／もり
に秋またんといひし人にみせたらはいかにはや／きせにしつみ
いてんとはりなりかし

五十四 飛鳥井女君、入水しようとする

かの舟には／日かすつもるま、に心ちもまことにあるかなきか
に／なり行をかくてしなはむなしきからをこれかれ見／あつか
はんもいみしうくちをしくなたうてなをいかに【73才】うみに
いらんと思ひてさるへきひまをみるにさす／かに人めしけくて

日ころにのみなり行にこの大夫／よろつにうらみつ、ころもの
せきをうらみわふれと／おなしさまをのみなこやかにいへはさ
すかになさけた／つ心にていとよはけなるさまを心くるしうお
もひ／つ、ちかくもえよらさりけりか、る程に大貳の舟／にや
むことなき人のなへての女房にはにぬかまし／りたるに心かけ
てかたらひありきけりよひすく／るまでみえぬほとをうれしと
思ふほとにかゝること／をめのといとやすからすた、しきにも
君のかくふ／しいり給へればそれこそかしのやうにておはせ
まし／かはかゝる事なからましと思ふにもいと、心うくつらう
【73才】おほえ給へはをのか身をとさまかうさまもせため給よ
／かゝる人のものいたく思ふはいみ侍なりたいらかにて／いの
ちあらはわすれかたふおほすらん人にもあひみさ／せ給てんい
とをさなくいふかひなき人の御心はいか／なる人があるなどい
みしき事をいひきかすれとこの／大夫の見えぬおり／のいて
きたるを我思ふことは／なりぬへきなめりと思ふよりほかの事
もなければあ／なあはれなるにまかせてはみてあなかに身を
／もなしてかくうきめをはみするそかし身をなけ／たるあとに
めのといかなるありさまにてなからへん／とさすかに哀にはか
なくおほえ給へはいと、ねをの／みなきていらへもし給はねは
うちむつかりてたち【74才】ぬるまにかしらもたけてつく／
とおきのかたを見や／れは空はいさ、かなるうき雲もなくて月
のさやか／にすみわたりたるにうみのおもてはきしかた行すゑ
／も見えずはる／とみわたされたるによせかへるなみ／はか
り見えて舟のはるかに消行か心ほそきこゑして／むしあけのせ

とへこよひとうたふもいと哀にきこゆ／□□□なかれてもあふせありやと身をなけくむし／あけのせとにまち心みんとて袖をかほにをしあて、／とみにもうこかれぬほとに人やみつけんとしつ心／なければなく／ひとへはかまはかりをきてかみかひ／こしなとするにありし御あふきのまくらかみにあ／りけるか手にさはりたるも心さはきせられてまつ【74ウ】とりてみればなみたにくもりてはか／しくもみえ／すすみはかりそつや／としてた、今かき給へるさま／なるにさしむかひたるおもかけさへふと思ひ出られこ／の世にて又み奉るまじきそかした、いまかくなり／ぬるともしり給はていつこにいかにしてかおはすらんね／やし給ぬらんざりともねさめにはおほしいつらんかしなと／よりほかは又なき心まとひなりす、りをせかひにと／り出てこの御あふきにもかゝんとするにめもき／りふたかりてもわなゝきてとみにもかゝれす／□□□はやきせのそのものくすとなりにきと扇の／風よふきもつたへよえもかきはてす人のけはひ／すれはとうおち入なんとてうみをのそくいみしうおそ【75才】ろしとそ【了】

注「香」の下に「の」と傍記。

書誌情報

【請求番号】 九一三・三七／五〇〇四

【装訂】 四半本の袋綴 四冊

【書写年代】 近世中期写

【寸法】

一冊目（巻一） 縦二七・四cm、横二〇・三cm
二冊目（巻二） 縦二七・四cm、横二〇・二cm
三冊目（巻三） 縦二七・四cm、横二〇・二cm
四冊目（巻四） 縦二七・四cm、横二〇・二cm
なし

【表紙】

紗綾形地に蝶・蜻蛉散らし宝相華唐草文

【本文料紙】

色替わり染紙

【内題】

なし

【紙数】

一冊目（巻一） 全七五丁、二冊目（巻二） 全八六丁、三冊目（巻三） 全一一三丁、四冊目（巻四） 全一一八丁。各冊遊紙なし。

【字高】

各冊約一九・七cm

【半葉行数】

一二行

【一行字数】

二〇～二五字

【和歌表記】

歌は三字下り。一首二行書きで二行目は下がらず、また末尾は地の文に続く。

【書き入れ】

なし

【保存状態】

良。綴糸にほつれ、数箇所汚れありの状態であったが、日本語日本文学科収蔵後、綴糸は修繕済み。三冊目の裏表紙小口、四冊目の裏表紙にわずかに虫損あり。

【箱】

かぶせ蓋桐箱の表の中央に「中院右府通躬公筆狭衣全本 世恭審定」と墨書あり。箱の裏の中央には「中院通躬公 通茂公ノ子」と書かれた貼紙

【極書】

（縦一〇・一 cm×横三・三 cm）あり。現在は箱の一部が割れており帙で保管。

和歌短冊の包み紙と思われるものに、江田世恭による「中院前内府公通卿 詠哥 享保十八年十二月廿一日實全朝臣任参議同月廿五日被参賀祝酒之席賜此一首」という極書あり。

※實全…滋野井実全。（みづのゐ）左記一二月二一日に参議に任ぜられ、二五日に拝賀着陣。この年に通躬は六六才。

【藏書印】

各冊の一丁表に「清水泰藏書」の朱正方印。

※清水泰…明治二九年（一八九六）—昭和四四年（一九六九）。国文学者。京都帝国大学文学部国文学科卒。立命館大学名誉教授。

付記

1 書誌情報の調査にあたっては富澤萌未氏（本学非常勤務師）の協力を得た。

2 本研究は科学研究費助成事業「狭衣物語諸本研究—三条西家本を軸にして—」（基盤研究（C）15K02224／研究代表者…神田龍身）による成果の一部である。